デビルちゃん

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
デビルちゃん

【Ｎコード】
Ｎ０５４２Ｃ

【作者名】
桂　ヒナギク

【あらすじ】
同級生の女の子から渡された妙な箱から可愛い可愛い女の子が現れた。名前は悪山魔美。魂と引き換えにどんな願いでも三つまで叶えてくれる、らしい。――更新不定期

悪魔が現れた

僕の名前は九重（ここのえ）優。東京高等学校に通う1年生だ。
その僕が、放課後に帰りの支度をしていると、ツインテールの女の子がやって来た。
「優くん、これいらない？」
と、女の子は魔法陣の書かれた四角い妙な黒い箱を出した。
何これ？――僕がそう訊ねると、女の子はこう言った。
「この箱はどんな願いでも三つだけ叶えてくれる不思議な箱なの。私、いらないから優くんにあげるよ」
はい――女の子はそう言って、その箱を僕の手に納めた。
と言う訳で貰ってしまったのだが、この箱本当に願いを叶えてくれるのだろうか？
（えい、考えててもしょうがない）
そう思った僕は、それを持って早速家に帰った。

家に着いた僕は、二階にある自分の部屋の机に向かって例の箱を調べていた。
「どうやって開けるんだ？」
僕は独り言を言いつつ、その箱を左右へ無理に引っ張った。
パカッ！――と、箱は開いた。
すると、白い煙がボンッと出て、その中から黒い革の服を着た女の子が現れた。
（えっ、何で人が？）
僕は箱から出て来た女の子を不思議そうに見つめた。
（可愛い）
僕は女の子に見惚れて頬を赤く染めた。
その僕に女の子は、

「あ、あの、どうかしましたか？」
「えっ、否、何でも無い。て言うか、君は一体？」
と、僕が訊ねると、女の子はこう言った。
「初めまして、悪山（あくやま）　魔美です。ご主人様のお名前を教えて下さい」
「こ、九重　優」
「では優さん、どんな願いでも三つまで叶えてあげます。何を叶えて欲しいですか？」
「か、叶えるって、どう言う？」
「えぇっ、何も知らないで開けたんですか！？　てっきり知っててて開けたのかと……」
と、がっかりする魔美。
「で、君は一体何なの？」
「私は人の命と引き換えにどんな願いでも三つまで叶える悪魔（デビル）です、って言えば分かるかな？」
馬鹿馬鹿しい――僕はそう言って、ベッドに横になった。
「これは夢だ、夢は寝て観よう」

見ちゃった、悪魔の裸

ジリジリジリジリ――翌朝、目覚まし時計の音で目が覚めた僕は、五月蝿い音を止め、辺りを見渡した。自称・悪魔はいない。
「やっぱ夢か……」
僕はそう呟き、部屋を出ると一階にある洗面所に向かった。
ガラガラ――と、僕は洗面所の扉を開けた。
すると、突然目の前に、裸の女の子が現れた。その女の子は、背中に黒い翼とお尻に黒くて細長い尻尾を生やしていた。悪山　魔美である。
「ゆっ、優さんっ！？」
「ごっ、ごめん！　そのっ、まさか君がいるなんて思わなかったから！　決して見ようとして開けた訳じゃないから！」
僕はそう言って、顔を真っ赤に染めると共に、鼻からそれより濃い液体を垂らした。
「優さん、鼻血！」
魔美はそう言って、リビングへすっ裸のまま飛んで行くと、ちり紙を手にして戻って来た。
「優さん、これで拭いて下さい」
魔美はちり紙を僕に渡した。
受け取った僕は、慌てて鼻血をそれで拭き、穴に挿して止めた。
「あ、あのさぁ、僕、君の裸見ちゃったけど……」
僕がそう言うと、魔美は顔を赤くし、
「最低！」
ボグッ！――魔美は僕のお腹を一発、思いっ切り殴った。
「全く、人間の男ってどうして女性の裸を見たがるのかしらね？」
魔美はそう言いながら、洗面所の奥にあるお風呂の扉を開けて入って行った。
「絶対覗かないでよっ！？」

「の、覗かないよ！」
そうは言うが、本当は覗きたくてたまらない、僕である。

最初のお願い

それは、学校へ登校中の事だった。
「で、何で君が付いて来るんだ？」
僕は後ろをぴったり付いて来る魔美に訊ねた。
「だって、私がいない間に優さんが死んじゃったら、奪えるモノも奪えなくなるじゃないですか」
「何だよそれ？」
こいつは何が何でも僕の魂を取る気だ！――僕はそう直感した。
その時、誰かが僕の肩をポンと叩いた。
「優くん、おはよう」
そう言ったのは、この前僕に箱をくれたツインテールの女の子だ。
彼女の名は、小此木（おこのぎ）　桃子。幼稚園の時からずっと一緒の、幼馴染みである。
僕はその桃子に、おはよう、と挨拶を返した。
「所で優くん、さっき誰と話してたの？」
その問いに、僕は後ろを付けて来る魔美を指差した。
「誰って、この子だよ」
すると、桃子は頭に疑問符を浮かべ、
「この子って誰？　後ろには誰もいないよ？」
「えっ？」
僕は後ろを振り返った。しかし、魔美はちゃんといる。
「いないって、ももちゃんには視えないの？」
僕が言うと、魔美が答えた。
「優さん以外の人間に私の姿を視る事は出来ませんよ？」
何を言ってるんだ？――僕は頭の中がこんがらがった。
「優くん、頭大丈夫？　今日の優くんちょっと変だよ？」
「嫌だなぁ、何言ってるんだよ？　そんな事無いよ。あ、そうだももちゃん。先に行ってて！　僕、忘れ物したから取りに戻る！」

僕はそう言うと、慌てて魔美を連れて来た道を戻った。
「ねぇ、僕以外の人に君の姿が見えないってどう言う事？」
「それは私が霊体だからですよ」
「霊体って？」
「幽霊って解ります？　動物が死んで魂だけの存在になったと言う。それが霊体なんです」
と言う事は、こいつは僕に憑いている訳？――そう思った僕は、慌ててお経を唱えた。
「南無妙法連華経、悪霊退散！」
「そんな事しても無駄ですよ？　私たち悪魔（デビル）は悪霊より質（たち）が悪いですから」
（なんと言う事だ。僕は悪霊より質の悪い者に憑かれてしまったのか……）
「所で優さん、あの娘は？」
「あの娘って、ももちゃんの事？」
その問いに、魔美は頷いた。
「ああ、ももちゃんは君が入ってた箱をくれた娘だよ。僕ね、ももちゃんの事が好きなんだけど、あの娘は僕の事なんか全然……って、何言わせてんだよっ！？」
「へぇ～、じゃああの娘と両思いにさせてあげる」
魔美はそう言うと、魔法陣の書かれた例の箱を取り出した。
『あなたの一つ目のお願い、受理しました』
箱がそう言い終えると、魔美はそれをしまった。
「じゃ、早速叶えて来ます！」
魔美はそう言って、桃子の下へ飛んで行った。
「ちょっと待て！」
僕は慌てて駆け出した。
（あの悪魔、一体何をするつもりだ？）
あっ――僕は桃子を見付けた。
「ももちゃん！」

僕は彼女を呼んだ。
桃子は僕に気付くと、止まって振り向いた。
「あっ、優くん。随分早かったね」
と、その時、桃子の背後に魔美が降りてきた。
何をするつもりだろうか？――気になった僕が魔美を見つめていると、彼女は桃子の体に重なって消えた。
「えっ？」
桃子は驚いた顔をすると、そのまま動かなくなった。
「ももちゃんっ！？」
僕は慌てて駆け寄った。
「ももちゃん、大丈夫？」
僕がそう訊くと、桃子はゆっくり頷いた。
「優さん、一つ目のお願い叶えましたよ」
桃子は顔を上げ、笑顔でそう言った。
「はい？」
「今日から私が、小此木　桃子です！」
桃子はそう言うと、背中に黒い羽とお尻に細長い尻尾を生やした。
「おっ、お前悪魔（デビル）かっ！？」
「はいっ、悪魔（デビル）の悪山　魔美です。今日から小此木　桃子としてあなたの恋人にならせて頂きます！」
「何だそれぇ――っ！？」

最初のお願い（後書き）

「エクソシスト」キター！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0542c/

デビルちゃん

2010年10月20日13時49分発行